

今月の編集 〈あごら松山〉



〈あごら松山〉 おんな講座パートⅠ

小倉千加子さんと私たち

- 講演によせて
- 講演を聞いてひとこと
- 録音テープを聞いて

フィリピンの女たち 奥川 睦

ブラジル見聞記 桑原ちゑ子

『国会』ウォッチング

目次

●へあごら松山へ発信開始！	1
●小倉千加子さんと私たち	2
講演によせて	3
講演を聞いてひとこと	15
録音テープを聞いて	17
●フィリピンの女たち 奥川 睦	21
●私のブラジル見聞記 桑原ちゑ子	29
●国会ウォッチング 大島ふさ子 斎藤千代	39
●フェミニズム英語 奥川 睦	42
●あごら読書室	43
●あごらのあごら	46

＜あごら松山＞ 発信開始！



早いもので、〈あごら〉は前身の〈BOC〉から数えると、ほぼ三十年の歴史を重ねたことになる。戦後、フェミニズムグループが次々に誕生しては消えていくなかで、一番軟弱といわれた〈あごら〉が一番の長寿者になった。軟弱で、肩肘張らなかったのが長寿の一因かもしれない。

しかし振り返ってみると、どの時期も一貫して、元氣はつらつだったわけではない。息絶え絶えのときも、落ち込んでいた時もある。それでも続いて来たのは、全国のかかの〈あごら〉が、元氣だったからだろう。

もともと〈あごら〉は、東京から地方へという中央発信型の情報の流れに疑問を提して出発した。月刊は原則として拠点持ち回りだった。各地の拠点が各地域の活動の中心的存在になり、エネルギーの大半がそちらに費やされるようになって、拠点持ち回りは平等に実行されていないが、「元氣なところが自分の力量に応じて」……で、何とか発刊を続けている。今年は厚い『あごら』や薄い『あごら』が届いて、氣をもんだ方も多かったと思うが、これが〈あごら〉流、「無原則の原則」ということかもしれない。

一九八九年春創設の〈あごら松山〉は、立ち上がりの集会に六百人を集め、ブックレット第一号は自分たちの手で……と、意氣盛んだった。厚い保守の地に小倉千加子さんを招いた出発も異色で、衝撃を与えたが、それを吸い取るやわらかな心があったことは、この号の感想文のみずみずしさにもうかがえる。小倉さんの講演会全記録収載という用途は残念ながら実現できなかったが、〈あごら〉の新しい芽は、「無原則の原則」にまたエナジーを与えてくれた。

(千)

あこら松山・おんな講座パート1 おんなから現代を読む

小倉千加子さんと私たち

——フェミニスト心理学者 小倉千加子さんの講演を聞いて

松山市の奥川睦さんの呼びかけで発足した「あこら松山」。その旗あげ集会のゲストは、大阪西成蹊女子短大助教授、心理学者の小倉千加子さん。「母娘の関係とフェミニズム」と題する講演のあと、質疑応答でエキサイトしました。

小倉さんは「セックス神話解体新書」「松田聖子論」など、女性をめぐる問題をユニークな視点からとらえた著書で知られています。この講演でも、知らず知らずのうちに生活にしみこんでいる女性差別の考えを鋭くとらえて、参加者の驚きやため息を誘いました。「主婦にとって一番必要なことは、ほかの人に甘えること、依存させること、依存し合うこと。自立、自立という時代はもう終わっている。自立もいいが、依存もいいし、今まで思いもかけなかったような欲求を、本当に実行していいんだ。フェミニズムは、第二期に入っているのです。一緒にいて楽しいことをやろうじゃないか、いっしょに遊ぼうよというフェミニズムがあってもいいじゃないか」という小倉さんのお話に、その後たくさん感想が寄せられました。それをこれからご紹介しましょう。



講演によせて

「翯」の字から

山本 耕一路

「翯」の文字を

なぶると読ませるのだが

視覚的な思慮で模索すると

男の権力と男仕事の匂いがしてならない

廿一世紀に向けて

現代女性の

社会的地位と差別解放を目指して

つい つい

「嫩」こんな私的造形文字を

書いてしまったよ——。

(詩人 八十三歳)

自分史に重ね、納得



野沢 聡子

講演会の日、会場の受付の脇の部屋で小倉先生にお会いした。一見して「あ、苦手なタイプ」。眼光が鋭い。見透かされているようで、下手なことを言うと、どこまでもそこを突いてこられそうだ。私は、同じように歩いていても人によく道を聞かれる、どちらかといえば「与しやすし」と人から思われるタイプ（実際はかなりヤリにくい人間なので、見掛けで騙して得をしている部分もあるが）。小倉先生はどう見たって「与しにくし」である。そして、「与しにくし」型の人は、私のようなタイプを軽蔑するものだ。そうした心理的な作用から、はっきり言って、小倉先生が講演で何を言われても、とうてい私など共感できまい、と断念したのだった。

しかし、演台に立った小倉先生は、いきなり超・魅力的

な語り手に変身された。ちょっと斜めに構えた態度は、シニカルなユーモアになり、鋭い眼光はそのまま、「痒いところに手が届く」独特の論理を展開した。私は第一印象の苦手意識をすっかり忘れて笑い、深いところで共感することができた。

高校のころ、体育でマラソンをした。走ったあと暑いのでジャージを脱ぎ、薄いTシャツ一枚になる。私が脱ぐのを男の子が「楽しみに」待っている、と男友達から聞かされた。私は走るのが速く、男子を追い抜くほどで、確かに少しグラマラスではあったけれど、自分では「女」であることの自覚がほとんどなかった。初めてセクシュアリティとしての「女」の自覚を持たされたのだ。その時はただショックで、男子が「向う側の人間」に思え、自分が不当に汚された気分だった。その後なんとなく、男子の論理が当然で、私が変に潔癖あるいは単に無自覚だったのかな、と思うようになった。

私があの時直面したのは、社会を浸している男女の性の神話そのものだった。わずか十六歳で、いやもっと幼いうちから神話に取り込まれているのだ。そして、私のように、違和を感じても、自分の側がおかしいんだ、と思ひ込まさ

れる。講演を聞いて、そうした構図が見えた。しかし、より深い衝撃を受けたのは、その構図を最も強力に助長するのが、見るからに敵の顔をした論理ではなく、味方であるはずの母親や先輩、友人の女性たちなのだ、という点だ。そう言えば、と思い当たる節はいっぱいあった。シンデレラの読み変えは耳に痛かった。母も私を箱入りに育てようとした。母の期待を裏切り、娘は「気づいて」しまったが。こんなふうに突然変異があるから世の中捨てたもんじゃない、と樂觀するすぐ後から、しかし、その神話を崩したあとで何を見ることになるのか。男も女もほんとうに真摯に生きなければ、どうしようもなくなると、自分のヤワな部分をやはり突かれる思いだった。（新聞記者 二十五歳）

同じ病を持った女

市場 恵子

初めて小倉千加子を見た（！）のは、愛読している『婦人民主新聞』（紙名を変えたら？との声もある）の新年号においてである。「自由に、もっと自由に」と冠されたその記事の内容もさることながら、脇に掲載された写真の、

まるで思春期の少女のようににはかんだ彼女の身体に、とても初対面とは思えぬある種の親しみを覚えた。そしてなぜかその時、図々しくも一方的に感じてしまったのである。あつ、もしかして、私と同じ病を持った女（人）……。

「人はなぜある人を選択的に好きになるのか」という社会心理学における対人魅力研究の問いは、近接性・身体的魅力・類似性・相補性など、説得力をもっていくつかの規定要因を導き出してきた。今回私の場合、まさにこの「同じ病（類似性）」をほとんど直観的に嗅ぎとったところから小倉千加子への接近が始まったと言つてよい。

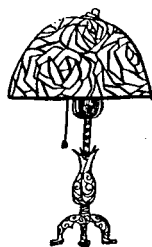
遅ればせながら『セックス神話解体新書』を書店で購入してきて読み始めた。私自身が個人的興味で読みあさった本も何冊か並んでいる。細部においては多少の問題点を感じるものの、ここまでよく似た感覚で読み取れる人はそういない。私はまずまず「同じ病」を確信するようになった。折しも、昨夏の中国旅行で知り合った松山の奥川さんから、どうした気まぐれかフラリと便りが届いた。相変わらず忙しく駆けている様子そのままの字体と文体に、「小倉千加子」を発見した時の嬉しさ。人と人とをうまく出会わずのために、時はちゃんと満ちてくれるものらしい。

それからまもなく、「学校における性教育の問題点」というシンポジウムに、講師の一人として小倉千加子の名

があがっていたため、持前のミーハー根性で出かけて行つてみた。シンポそのものは正直いってあまり愉快なものではなかったのだが、休憩時間に同行の友人と逃げ出したエアスポットに、小倉千加子が偶然はまりこんできてくれたものだから、私は迷いもなく「岡山へ一度遊びにきませんか？」と彼女を誘い、そして即座に話はまとまった。

こうして、私は松山と岡山、二度にわたつて小倉千加子のトークライブを堪能する機会を得た。彼女のしゃべりは確かに過激で痛快である。差別用語や非科学的論述もボンボン飛び出すため、聴衆の中には「ちょっと待った」と言いたくなる人も出てくる。心理学とフェミニズムの枠組みに依拠しすぎではないかとの懸念もある。しかし、私は基本的にには彼女の新鮮さを支持したいと思う。「フェミニズムにヒューマニズムはいらない」と言い切る彼女の横顔に、私と同病の相を見て取るからでもあるが、かといつてその病をフェミニズムの狭い枠に閉じ込めておくのは惜しい気もしている。

（大学講師 三十八歳）



偉大な「こじつけの美学」

に脱帽

菊地 佐紀

フェミニストの論客として異彩を放つ小倉千加子氏の松山講演に聴衆の一人として参加することになった。

残念ながら氏の著書もまだ読む機会に恵まれていなかったのだが、ぶっつけ本番にご本人の風貌に接してみても、改めて新鮮な驚きを喫した。

地方感覚ではない、都会派のインテリジェンスに加えて、齒に衣着せぬ語り口のさわやかさ、豊かな喜劇的センスに、集まった二百余人の聴衆は完全に魅了され、この人のベースに乗せられ、一時間三十分を振り回された、といっている。

ところが、今年の『文学界』五月号に掲載された、作家富岡多恵子氏との対談「作家のフェテッシュについて」の中で小倉氏は、「自分の笑いが受けるのは大阪と東京だけで、松山では全然駄目だった」と発言しておられるのが少し気になった。

軽妙洒脱に、しかも鋭く対象にきりこんでくる氏の話術の巧みさに、私自身、腹の皮のよじれるほど笑ったし、周

囲の若い女性たちからも、笑いと拍手が起こっていたはずなのに、二百人もの聴き手の中には笑いのハーマニーについてゆけないで困惑気味の人もいたものかどうか、それが壇上の話者に敏感に反応したのかも知れない。

松山はまだまだ保守的な田舎町であり、女性のものの考え方や価値観、行動もかぎられた土地柄なので、型破りの女性論客の唱える威勢のいいフェミニズム論を新鮮と受けとめる以前に、煙にまかれて、いきなり黄粉をまぶされた顔つきになったアンチフェミニストも会場にはいたのかも知れない。

実際、この一見かわいらしい若い女性の紅唇から、「やるやらない」などという性的俗語がぼんぽん飛び出した時には、ど肝を抜かれたものだった。

シンデレラから白雪姫に至る女性の宿命論の展開や、向田邦子の小説『リンゴの皮』をフェミニズム文学と指摘するあたりは些かにこじつけと取れなくもなかったが、しかし、この方便論には、既存の人生論を根本から覆して、女性の主体性を獲得し守りぬこうとする小倉千加子氏その人の有無を言わさぬ強固な意志と迫力が漲っていた。

「アイドルを語ることはその時代に生きている女の子たちを語ることだ」と標榜するこの無邪気で陽気な現代の才女は、好感度百パーセントで松山の女性たちに迎えられた

ことは確かだ。

『文学界』の対談では大作家の富岡多恵子氏を軽くイナし、躍起になる富岡氏を相手に、ひらりひらりと体をかわすその当意即妙ぶりが痛快だった。

偉大なるこじつけの美学、などというと叱られるかもしれないが、小倉氏のこの講演は、地方の狭間に住む女性の新しい脱皮を図る〈あこら松山〉の発足に新鮮な示唆を与える、まことにユニークな企画であった。

(文学同人誌『アミーゴ』主宰)

小さな望み

塩次 雅子

〈あこら〉。初めて耳にする言葉ですが、なぜか私には新鮮に感じられました。〈あこら〉を支持される奥川さんとの出会いから、今まで家の中にこもりがちだった私に新しい風を吹き込んでいただきました。そんな矢先、小倉先生の講演を拝聴することができ、少なからず自分を見つめ直すチャンスも同時に与えられたような気がしました。

人間は平等であり、生きる権利があり、個々が平和に暮

らしていけることが理想です。小倉先生のお話の中で、日本の社会では、昔から女性より男性が優位だと決めつけた考えがごく自然だったというお言葉を聞きました。その時ふと、十数年前の義父や義母の言葉を思い出しました。

私が結婚して第一子の女の子を出産した時は初孫だったせいか、「無事にかわいい子が生まれてよかったネ」と心から言うてくださいました。それから二年後、男の子を出産した時は、「お手柄だったネ、ありがとう」と最高の笑みを浮かべてねぎらいの言葉をかけてくださいました。十数年前のこの言葉が、小倉先生のお話をお聞きしながらはつきりと思ひ出されたのが不思議でした。

今まで考えても思ってもみなかったことですし、結婚した時から、夫やその家族に仕える、夫と共に新しい道を切り開いていくことが当然だと思っていましたし、それが幸福に繋がると自然に考えていました。外に目を向けることも大切なことだと思いますが、「家庭の中で主婦としてプロフェッショナルになることだってできる。無限の可能性がある主婦の仕事ほどやりがいのあるものはないのではないか」と夫に言われ今日までできました。この言葉は私には重荷ではありませんでしたし、むしろ誇りを持ってやってきました。人それぞれ、生き方、性格、価値観等違いますから一概には言えませんが、安定した生活の中から、女性

でなければできないきめ細やかな思いやりや行動が、自然に社会に溶け込んでいくような気がします。十七歳になる娘は自分の意見をはっきり言いすぎるくらい言いますが、私からすればうらやましいと思う反面、社会に出てもこんなに言って大丈夫かしらと気にもかかります。

今回、小倉先生のお話をお聞きして、私もこれからはほんの少しずつでも家庭の中から脱皮していけるのではないかと、小さな望みがわいてきました。そして、素晴らしい女性との出会いを大切にしていきたいと思いました。

(主婦 四十二歳)

男と女の生き方に差はない

宇都宮 真由美

「溜飲が下がった?」

私は日ごろより男女平等を唱えている。日本国憲法第一四条第一項は男女平等を謳っているし、第二四条第一項はとくに夫婦の平等を謳っている。当然のことながら、掃除、洗濯、食事のしたく、整理整頓、子どもの世話etc、何も妻の仕事ではない。夫もするべきなのだ。夫は妻の収入

をちゃっかりあてにして、「おれが生活費をかせがなければ、妻子は食えないんだ」なんていう肩の荷はとくにおろしている。こっちだって、家事や育児という荷物を、半分くらいおろしたい。とはいうものの、家事をしないこと、子どもと時間を共有できないくらいこというしるめたさから、どうしても逃れられずにいる。そして、そういうおのれ自身が、うとましい。

このような日々を送っているとき、小倉千加子氏の講演「母娘の関係とフェミニズム」を拝聴した。実に爽快であった。男と女の生き方に差などあるはずはない。あるとすれば、男がつくったものである。誕生の瞬間から命名にはじまる女の生き方に対する男の介入。そしてわれわれ女も、それにいかに洗脳されているか。「そうなんだ、そうなんだよ。なぜ今まで気がつかなかったんだろう。自分の中であれほど自問自答したのは何だったんだろう」と相槌の打ちっぱなしであった。白雪姫がシンデレラの母で、シンデレラがまた白雪姫の母だということは気がつかなかったのは無理がないとしても、いとも簡単に自分の胸の内を整理されたような気がして情けなかった。しかし、おかげですっきりした。まさに、溜飲の下がる思いであった。この講演に誘ってくれた友人の言葉どおり、元気を引き出しても良かった。しかし、講演から三か月、今の私は、といえば、

あいもかわらず、うしろめたさから逃れられず、自問自答の毎日である。でもいいか。たとえ一時でも溜飲が下がったのだから。また、こういう経験をしたいものである。

(弁護士 三十九歳)

チンダラリン コンプレックス

夏井 紀明

シンデレラコンプレックスという言葉を目にしたしてから久しくなります。正確な意味は知らないが、素直に考えれば、不当に虐げられていた女の子が、救い出されて幸せになるということなのでしょう。それを現代的に解釈して、能力も魅力もないくせに、玉の輿に乗るという、宝くじ的な幸運を夢みるだけで、一向に己を磨くことをしない女の子が多いという現象を皮肉っているのだらうと、独断と偏見で考えています。

今回、小倉千加子さんの話を聞いて、白雪姫コンプレックスということをつないで考える機会を得て、良い勉強になりました。女の人は、理屈で納得していても、自らに疚しい痛みを覚えて、苦い笑いになったことでしょう。男の

立場では、意地悪い快感をもって、楽しく聞かせてもらいました。虐げられた者が、次は虐げる者になるという悲劇は、昔の軍隊、今も多くあるいじめ等々、枚挙にいとまがありません。業とも言うべき、人間の普遍的な習性の一つだろうと思います。しかし、その残酷な仕打ちを、わが子娘に向けるのだから、女の人は恐いですね。オヤジはムスコに嫉妬して殺したくなったりすることはないので救われます。もっとも、ムスコはオイデブスコンプレックスで殺したがっているのに、オヤジのほうで気がついていないのかもしれない。

自分は、男（女）としていかに生きるべきか、相手は女（男）としてどうあってほしいかという価値観（人生観そのもの）は、それぞれの育った家庭の文化が決定的な影響力を持つという意味で、味覚と同じではないでしょうか。どんな異性をおいしく感じるかは、息子にとっては母、娘にとっては父を主なモデルに、意識の底でかなり早く形づくられるのではないのでしょうか。その意味でもおふくろの味に似ているような気がします。礼儀作法、お洒落感覚から処世術まで、価値観は家の文化そのものです。親が教育の権利や義務を放棄しがちであり、マスコミ文化の波に押し流されているとはいえ、やはり親の影響力が大きいのは、仕事から、家庭訪問などで親に会ってみるとよくわかりま

す。幸なことに、私自身は、変則的な家庭に育ったおかげで、女性の積極的な生き方を比較的素直に受け入れることができ、今回もごく数少ない男性の聴衆の一人となりました。しかし、年齢相応の人生経験から女性への理解を深めたかという点、ただ女の人に対して、女を意識せず、ただの人として接することが多くなったといったほうが嘘が少なくようです。若いころは、女性差別の最たるものと知りながら目を輝かせて見ていたエロ写真に、最近一向にピンとこなくなっている自分を感じ、女性を征服支配したい男としての能力や意欲が減退してきたというだけのことではないか、と自信のないこの頃です。

(高校教員 四十九歳)

頭をガーンとなぐられ、
それから……

大森 公子

ちやうど九歳の娘から、「お母さんも、お父さんも、おばあちゃんまでが、お兄ちゃんの味方をする。」というひがみのこもった言葉を何度か聞かされていたところだったので、私たちは毛穴から「男尊女卑」の思想がしみ込んで

いる、という小倉さんの言葉に、なるほど、そうなのかと、妙に納得してしまった。

確かに、私自身、兄妹三人(兄二人)のため、当然のように、女の子は嫁に出すのだから、適当に教育を受けさせてかわいがっておけば、みたいな考えのもとに育てられたと思う。そのため、くやしい思いもした。けどどしっকার者の母の様子を見ていて、ほんとうの強さ、ほんとうの尊さとは、一般常識や外見からは判断すべきではないと子どもなりに感じていた。男性優位の考えは、世の中でずいぶん叫ばれていたし、それこそ肌で、無意識のうちにそれはおかしいとも感じていたので、自分に娘が生まれてからも、ごく自然に息子と平等に扱ってきたつもりだった。娘のひがみは、息子を特別扱いしていたために起こったものではなく、ただ自分とは違う異性の子として好奇の目で見ていたために生じたことだったろうと思う。少なくとも私はそうだった。だけど、夫と祖父母はやはりちがっていたかもしれない。

小倉さんの講演をお聞きして、一言で感想を述べるとすれば、頭をガーンとなぐられたような気がしたということになり、正直言ってしばらくの間は、頭の中で自分の考えを整理できなかった。あのように、ひとつひとつ具体的に指摘されたちよつと攻撃的なお話は初めてだったので、お

どろきが強かったのだと思う。少し時間がたってからは、「何も同性なのに、あんな言い方をしなくても」という気持ちにもなった。

老人介護の問題については、確かに、妻、嫁、娘にたよりきっているのが現状だが、先日新聞で、老母の介護のために、定年までまだしばらく年数があるにもかかわらず、退職した息子さんの話を読んだ。介護は力のいる仕事だから、男である自分の役目でもあると考えての行動だということ。その人のやさしさと、心の広さ、強さに心打たれた。こういう男性がもっと増えて、女性の立場を理解してくれたら、女性も、もっと心やさしく、強く、広いしなやかな心が持てるのではないかと思う。この世の中は男性と女性しかいないのだから、もっともとお互いに協力し合えたらいいと思う。それぞれの持ち味を十分生かして。

(主婦 三十七歳)

“女”の過程に廿六感

山田 重俊

“母娘の関係とフェミニズム”とは、あまり聞いたこと

もないテーマだと一瞬思った。話を聞いているうちに、おいしいと理解されてきた。娘ができると一日でも早く養育者として自分の代わりになろうと母親は努める。これでは女性が女性自らを縛っている悪循環に陥るのではないかという提言がシンデレラ物語の内容追跡によって明らかにされると、なるほどなあと思った。

シモーヌ・ド・ボーボワール著『女はこうして作られる』という本を昔読んだ記憶がよみがえって、いつの間にか、女性が昔ながらの良妻賢母の型にはめられて育てられていく過程が実証的に明らかにされ、興味深かった。教育と環境がいかに女性のステレオタイプを生み出していくかを知ると、逆にその桎梏から脱却するには、よほどの強固な自意識を堅持していなければできないことだと思われる。今、中高校の教科書の中でフェミニズムがどのように取り入れられ、どのように説明されているのか知りたいと思う。講演者はこの点にも目を向けて、おかしいところがないか、あるいはフェミニズム排除の姿勢が見えはしないかなどについても解剖して、そのプラス・マイナスを今後明らかにしてほしいと思う。

(年輪学習会代表 六十八歳)

女の「顔」

鎌田 明美

一般に言う純文学を読んで思ったことがある。

小説であるから、さまざまな人が出てくる。男も女ももちろんいるが、女には顔がないような気がする。女の気持ちがよく書けていないし、どれも同じのつべらぼうな女なのだ。文豪と呼ばれる人の作品を読むと、特にそれを感じる。

顔のない女を書く作家は男である。女のことをよく書いてあるような気がするものでも、やはり同じ女しか書けていない。書かれる女は、もの言わぬ女か、でなければ母やそれに類した女だからである。男が求めるのは、思想や意見を持たぬ女である。自分を甘えさせてくれる女である。そんな女は顔を持たないか、持ってもその顔を隠している。それが安全を手にいれる一番良い方法の一つであるからだ。求められるものを与えれば、代償として安全がもらえる。

講演を聞いてから、女流作家の本を読みはじめた。そこには、表にあらわれたり、隠れている女の顔が見えてくる

と思ったためだ。が、見えてこなければ悲しいことである。

(学生 十九歳)

発光想転換のチャンス

古賀 かをり

「私は女性」——これを意識するのは、とんでもなくうっとうしいことである。

たとえば、初めて取材でお目にかかったM氏。「女性にはつい甘くなってしまうて口も軽くなりますよ。いかなですなあ、こりゃ」などと周りに笑顔でアピールしながらも、その実、「女なんかに話すもんか。女にだけ口が軽い、そんな男とは思われたくない」と必要以上に頑な態度。全く腹だたしい。と思えば、ダイエツトを決めこんでいる期間中の宴席で、「飲めないお酒」を無理強いされることはなく、下戸の先輩に、「全くいいよな、女の子は」とうらやましがられ、私も納得したりする。

とにかく、この世の中、「女性か男性か」で「一人の人間に過ぎない私」が動かされる。立場が固定しない。そういうことを含めての「女性学」にこれまで深入りし

なかったのは、一つには性差別の実態を知ったって仕方ないというあきらめ、もうこれ以上知りたくないという弱気、そして文句より希望、得する時は大いに享受し、損する時は耐えようという「しおらしさ」からだ。が、今回、小倉先生のご講演に楽しく参加させて頂いた。

案の定、「女性をしめつける男性の厚かましき。人を侮った失礼な態度」を聞かされ、単純に不快になったりしたが、イントロのお話としてはユニークで聞きやすかった。

また、失礼を承知で申し上げれば、ファッショナブルでかわいい小倉先生が講演なさったことが、それだけでなんだかミーハー的に嬉しくて、逆に複雑な気分にもなった。

母親が娘の「女性化」を助長しているという話、喜んでうちの母に話したが、「私はそんなことしないわよ」とひとしきり否定したあと、「ただ私が言いたいのは、生意気な女性は嫌われるってことよ。笑顔じゃなくちゃ」と釘をさしてきた。小倉先生、ご指摘のとおりですね。

会場では、障害者運動の団体の方から「性差別も障害者差別も同じ差別なのに、なぜ運動してやってけないんですか」と意見がとび出し、講演そのものの意味合いを膨らませた。

会場に主婦が多かったのも「へえっ」という感じだった。だいたい主婦は、ご主人とは持ちつ持たれつのバランスの

とれた関係だろうと期待しているのに。違いますか。

これからの時代、女性が自立して認められていくには、発想の転換が必要なことはいくわかった。今回の集いへの出席者が多かったのはそういうニーズを感じている人が多かった証ともいえる。となると、運動要員はそろっているわけだ。今後、女性問題にどう取り組んでいくべきか、またご指導をおおきたい。

(記者 二十五歳)

△、何をすればいいのか

——主婦から見たフェミニズム

三浦 加奈代

「フェミニズム(女性解放運動)に関する講演があるのだけど行ってみない?」と友達を誘うと、たいていは「フェミニズムって何よ? 難しい内容じゃないの?」と一応尻込みする。

今回の小倉氏の松山講演は、そのような女性たちにもなじみやすかったのではなからうか。氏は母と娘の関係をシンデレラと白雪姫の立場に当てはめながら、フェミニズムをわかりやすく説いていき、他を排除するのではなく、お互を受け入れ合う優しい関係にもっていかうと結んだ。

さて、会場を出た後の参会者たちに、何がしかの変化を見ることができたであろうか……。

一方、私のフェミニズムへのとっつきも動機は単純で、敬愛する友を妄信しただけのことであった。その友人はフェミニズムに深い関心を寄せていたから、私が学ぶ気になればことは簡単だったはずだ。しかし、なぜか積極的にならない。理由は夫の反感が気になるからだ。

一般的に男性はフェミニズムなどに無関心である。平素、フェミニスト面している男でさえも内心では、「運動と名がつけばそれはヒマ人のすること、ましてや三食昼寝つき被扶養者の主婦の身で」と暴言を吐いているのではなからうか。

妻側に知的な会話や行動を望む夫でも、妻が何か具体的に技術を得ようと行動を始めれば、にがい顔をしはじめるにちがいない。その時間は家庭の作業にいそしんでもらいたいのだ。自分たちが仕事で副次的に恩恵を受け、その中で身についていく知性に、妻がよだれを出していることなど気づこうともしない。こうして主婦たちは取り残されていく。そうしたことも含めた背景から、当初のフェミニズムは男性攻撃に始まったのではなかったか。そして、気力ある有能な先輩諸姉方の努力と、長い年月のうちに今日の姿に変わってきたのだろう。

では今、講演を聞いた後の私たちは何をしたらいいのだろうか。まず、もっと知り考えること、それから伝え広めること。勉強会などに臨むことで何らかの次の展望が開けてくるのではなからうか。

こうしたまどろこしい歩みは、裏返せばそれだけ日本が恵まれてきたからとも言える。

現在フィリピン辺りで行われている運動は、すさまじいものと聞く。日々の生活の安定のない所では、皆が真剣にならざるをえない。

私たちも視野を広げて行く努力だけは続けていく必要があるのではなからうか。

(主婦 四十八歳)



講演を聞いてひとこと

◎小倉先生の堂々とした態度を見ていて、この人は真実を見抜く力をもっている素晴らしい人だと感心しました。心理学者として人間として修行を積み重ね、その自信が人柄に表れているんだなと思いました。
「人を色メガネで見ないように！」とおっしゃったのが印象に残っています。

（村上洋子 主婦 三十歳）

◎「女性を一番縛るのは同性である母親」とのお話には思わずドキッとしました。私も娘時代には確かにそう感じましたが、自分が女の子をもつ親になった現在では、また考え方も違ってきました。

若くて自由な娘に対する嫉妬だけではありません。人に愛される娘になってほしい。人にうるおいを与えるような娘に育ってほしいなど、さまざまな親の願いが出てくるのです。型にはめてはいけないという気持ちと、それをキッパリと切り捨てられないもどかしさが、自分の中にも同居しているのです。

共感と反発を繰り返しながら聞いていました。

（土居節子 主婦 三十七歳）

◎「白雪姫」と「シンデレラ」の物語を心理学的に分析していたが、なかなか興味深く、なるほど！と思わずうなづく部分もたくさんあった。

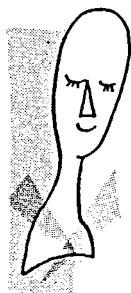
受付などのお手伝いは、継続してはできないと思いますが、その時々で都合がつけば、できるだけ手伝いたい。

（片山きみ子 主婦 三十七歳）

◎講演は楽しく拝聴しましたが、今は母親としての生活に大事にしたいと思っています。子育てを通じて自分の中にある矛盾を見つめ直したり、さまざまな思いに自問自答しながら日々暮らしていく中で、何かをつかめたら良いなあと思っています。

（堺井幸枝 主婦 四十二歳）

◎……さしあたり私は講演の中での小倉先生の言葉「自分



に unnecessary なものをどんどん捨てていく能力が必要」ということを思い直してみたい。著書にサインをへとおく読書会》の人たちとお願ひしたけれど、美しい魅力的な方で、小さな白い細い指に見とれてうっとりしてしまった。

(浅木紀美子 邦楽教師)

◎話はおもしろく、女性として理解できる部分もあったが、自分の現実の生活とは、あまりにもかけ離れていた。同じ話をあの場に居合わせた男性たちがどういう気持ちで聞いていたか知れたかった。

(匿名希望 主婦 四十歳)

◎話はおもしろかったが、家庭人としてはついていけない部分も多かった。独身で子どももない人の論ではないのかと思った部分もある。

(匿名希望 主婦 四十歳)



録音テープを聞いて

自らの性差別を思う

小倉 くめ

講演自体は、こういう観点があるのか、という感じでおもしろく、興味深く聞かせてもらいました。

私が関心をもったのは、むしろ後の討論で、中でも、女性問題を他のさまざまな運動や人権問題と連帯させていくべきではないか、との意見。それに対する講師、主催者側の答えにありました。

答えから言えば、私自身、連帯することが理想ではないか、というより、どの問題でもですけども、ある問題に本気で取り組むと、差別問題や人権問題を別々に切り離して考えることはできなくなるのじゃないか、と思います。

本気になればなるほど、それらは一番根本でつながっていて、それが枝葉で婦人問題として表れたり障害者問題として表れたり、あるいは同和問題、アバルトヘイト等々とし

て表面化していると思われるからです。

たとえば、障害者問題を例にとると、障害者同士の中にも差別意識は存在しますし、障害者の家族の中にも差別意識は存在します。

その反面、健常者の中に障害者への差別意識を持たない人もいます。同じように、女性同士の中に女性差別が存在し、男性の中に差別意識を持たない人もいます。

こう考える時、こうしたさまざまな問題を生む根底には、私は、本人すら気づいていないような差別意識が、たぶん後天的に潜んでいて、それがさまざまな現象により表面化したのが、個々の差別問題、人権問題等と呼ばれるものじゃないか、と思うのです。故に、今回、指摘されたようなある差別問題に取り組んでいながら、別の問題では自分が加害者になっていることに気づいていない、というような矛盾があるのじゃないか、という気がしています。

討論中、他のさまざまな問題と連帯することで自爆する危険性がある、と言われましたが、私は、差別の本質をとらえないまま問題を個々に解決しようとすることは、かえ



って、今、言ったことくに、差別問題を語っている本人が別の差別をしていることに気づかないような危険性を生む気がします。ふと、視力障害者数人が、部分的に象にさわり、それぞれが違った象をイメージ化した、という話を出しました。

私も一障害者で、《障害者とその家族の生命が保障されることを願う》という主旨のもとに小冊子を発行しています。最初、私も、問題意識の提供ということだけに焦点を絞っていましたが、さまざま実情を知るほどに、解決策まで模索しないではいられなくなりましたし、《障害者》の幅を《弱者全体》と広げるべきだ、という方向に動かざるを得なくなっています。

いかなる差別でも、本当に差別の痛みを感じている人間には種類など関係なく、その痛みは他人事ではないはずですし、あの当日のように、二つ三つの差別を抱えて生きている人だって珍しくはないはずです。そう考える時、本気で差別の痛みを訴えるなら、そうそう簡単に相手を見切ったり運動に線を引きたりすべきではないのじゃないか、と私は考えます。なぜなら、それはもう自分一人の問題ではない、と思うからです。できる限り歩み寄り、お互いの盲点を指摘しあい、個々が抱える問題を深く掘り下げながら横へも広げて行く。

講演中、小倉先生も言われています。「女性は、そういう感情的ではない」と――。

たとえ、それが正当な権利であっても、その権利がどう踏み にじられているかを知らない人には、そのことから話さなければ理解してもらえません。知らないことを『悪』として切り捨てるようなことをしないで、気長く勉強し合いたいと思います。

* テープを聞いての感想なので、失礼がありましたらお許しください。(《秘めたるま》主宰 四十三歳)

「差別とは」

池田 典子

小倉先生の講演のテープ楽しく拝聴しました。私は講演を聞いても受け流してしまうことが多いのですが、真剣に受けとめる人には、質疑応答での小倉先生の応え方に不満というか、不燃性の感を拭えなかったのではないかと思えます。でも、差別って心の意識の問題だから難しいですよね。奥川さんも言っていたように、差別ということでは十把一からげにしてしまうと焦点がボケてしまい、ほんと

うのところが見えなくなる恐れがあると思いますし、それぞれの差別のルーツを探っていくと違いがあるように、差別問題も区別していかなければならないと思います。手話サークルを通じて、聾啞の人たちと係わっていますが、差別（障害）に軽いも重いもないとわかりながら、でも、言葉の通じ合えない（言語の存在すらわからない）聾啞者は差別（障害）が重いような気がします。こんな感じ方をしている私ですから、質疑の時に同和問題、障害者問題が出たときは、違和感を感じました。小倉先生に答えを求めているような問題だと思いましたし、答えられませんよね。取り繕って答えたなら幻滅を感じてたと思います。

（三十八歳）

△7、自分で自分を生きさせている

野本美智子

残念ながら私は松山での講演を実際にはみていない。テープで会場でのそのまゝを感じることができたとは思いますが、やっぱりその場にいなかったのは悔しい。こんなことを、どんな顔をして話すのか見てみたかった。

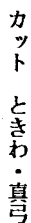
奥川さんから借りて読んだ（今は持っていますが）『セックス神話解体新書』にも大きなショックを受けた。テープを聞いた後しばらく「私っていったい今まで何をしていったらう」と、寝ぼけまなこをこすっている状態だった。その後、この本。今度はほんとうに目が覚めた。こんなスゴイ人が松山まで来て講演したなんて！こんな人のこんな話を聞いて前と同じ顔で平然と暮らしているなんて！（顔がそう簡単に変わったら怖いですが）。

覚醒後、世の中の男という男に腹がたち、彼らを増長させてきた自分を含む同性たちに歯ぎしりした。かと思うと、相手（男）は強くて賢くて寛大だと思いついての見過ごしの甘えも自分勝手にあった。と、あれこれ考えが飛び交い、肩に力が入ってしまった。若いころの私といえば、女の置かれてある立場に不信を抱き、「おかしい」と言うたひに親兄弟を驚かせ、父や兄に至っては、顔に青スジの二本や三本走らせた挙げ句、しばらくは口を聞いてもらえなかった。そういう場合、たいいていこっちも腹をたてて喋り出したから、ということもあろうけれど。

結婚後は、「変だ、変だ」をため込んで騒ぎ、亭主を激怒させた。

しかし、ほとんどの場合、はね返され厚い壁の前に引きもどされてしまっていた。私って人の期待を裏切るだけの

が、小倉さんのテープを聞き、本を読み、それ関係の本を読んでいくうち、嘆いて自分をいじめなきゃならないよ
うなことなんてしていないんじゃないの、とすっかり春にな
ってしまった。今やっと自分を自分で生きている、とい
う気がする。



フィリピンの女たち



奥川 睦

闘う連合組織へガブリエラに驚嘆

へガブリエラへの主催でマニラ国際女性会議が開かれる。参加しないかとへあごらへ事務局からすすめられて、時間もお金もない私が突然参加を決意したのは、八五年のナイロビ会議で出会ったフィリピン女性の活動に深く感動していたからだろう。NGOフォーラムでのフィリピンの女性たちの集会で、「USゴーアウト」を連呼しながら「ウィ・シャル・オーバーカム」を、手を取り心を一つにして歌った。その時から「フィリピンの女性はどうしてこんなに元気なんだろう。どこからこのエネルギーがわいてくるのだろう」と思い続けていた。ノンポリを決めこんできた私には、正直、政治を、「汚れた世界」とうとむ気持ちはあるし、この集会に対しても、違和感がなかったと言える。が、アメリカと結託したマルコス政権の非を鳴らし、不当に逮捕された夫は獄にいと訴え、次々にマイクを握る彼女たちの気迫は理屈抜きにスゴかった。

聞けばフィリピンの女性たちの連合組織「ガブリエラ」が発足する直接のキッカケは、反マルコスの会合だった由。当時、まだバラバラだった各女性団体、全国農村婦人連合「アミハン」や都会のスラム救済プロジェクト・「サマカナ」、不当逮捕され拘置状態の政治犯やその家族を支援する「カパティド」その他「ACT」「PAI」「FWC」「TFDP」「KMK」などが、結束を強め、連帯してこうと、具体的には、ベニグノ・アキノ氏暗殺直後に結成され、活動を精力的に展開してきたという。

現実的工夫と知恵で運営

マニラ到着後、「サマカナ」の人たちの案内で参加者全員が三か所に分かれて訪ねたスラムは、汚水と悪臭の中に子どもたちが群がっていて、ウサギ小屋にも程遠いマツチ箱のような家に、三世帯が住んでいるのだという。一族に子どもは十人前後、重なり合っても横になる場所はないのではないかと心配だ。貴重な水を運ぶのは子どもの役目。私たちが石油を入れるポリ容器（汚れた灰色の）で運んでいるが、井戸が深く、つるべ一杯くみ上げるだけでもたいへんな仕事。

その一角にディ・ケア・センターを設け、就学までの学力不足を補ったり、学童保育的な役割を無償に近い形で続けている。一方で、費用をひねり出すためスラムの一角にミシンを置き、シャツやブラウスを縫っていた。廃物利用のうまい手だと感心したのは

フラワー・サック・ドレスで、小麦粉の袋を布地に使っている。はじめ説明を受けたとき、「本当にフラワー（花）を布地に入れるのか」と聞いてしまったが、フラワー（小麦粉）違いだった。

〈サマカナ〉に限らず〈ガブリエラ〉傘下のプロジェクトはすべてこういうふう to 現実的な工夫と知恵で運営されているという。そういう息の長い持続が自信を生み、国を背負って立つ気概につながるのかもしれない。ラリーやデモなどの街宣行動や政治への注文も活発に行うとのことで、このところ当局の締めつけは殊のほか厳しいのだという。生命の危険をも辞せぬとの覚悟があってはじめて、あのパワーはわいてくるのだろう。

〈ガブリエラ〉の全国委員長、シスター・マリ・ジョンは、五、六か国語が自由に使えるヨーロッパ育ちで、たくさんさんの要職に加えて、マニラの聖スコラスティカ・カレッジの学長でもある。八面六臂の大活躍をする活力の源泉はと質問され、「禅と瞑想」と答える。いかめしい肩書とは無縁の、茶目っ気たっぷり的人格者だ。

日本の援助は自己満足

二十年近く前、サイドリーダーのテキストに選んだ小品集に、こんな作品があった。善意あふれる日本人が集まって話し合い、豪華な移動式フラッシュ（水洗）トイレを

フィリピンとかベトナムだかに贈った。ゲリラ的な軍隊が贈り先だったように記憶している。最初喜んで受け取った贈り物が、お荷物でしかないとわかるまでに時間はかからなかった。そこは水が乏しく、トイレ用の水など一滴もなかったのだ。

それでも、善意の品を捨てるわけにもいかず、どこへ行くにも引っぱって行かねばならなかった。グチが呪詛になり、贈り主を心の底から恨み憎むようになっていったという内容だ。作者はイギリス人だったように思う。

異文化に触れ、常識と思っていたものがガラガラ壊されるのを体験するたびに、気候や風土の違う場で異なった言語をつかって暮らす生活感覚のズレは、埋めがたいものがあるような気がしてくる。もっとも、だからこそ、違いをものともしない絶えざる交流と、違いを克服するための日常的な努力が必要なのであって、したり顔に不毛を唱えたり効率の悪さをタテに不協和音を排除する論調には、私はくみしたくない。

首都マニラは、コーラを飲みジーンズをはく若者と、排ガスとホコリをもうもうと巻き上げ、クラクションを鳴らし周囲を蹴散らして走る車で埋まっていた。同じように貧しくても、中国が車少なくジーンズなしの景色だったのと好対象。アジアの小アメリカと呼ばれるゆえんだらう。

一週間の会議はホテルと会議場だから設備は整っている。それでもトイレはつまる、ペーパーはない、水はフラッシュしない。が、そんなことは驚くにはあたらなない。ヘガ

ブリエラ」のシスターハウス（ミーティング会場兼宿泊所）もカソリック教会ゲストハウスも、シャワーは効かず、傍らのポリバケツの水をバシャバシャとかけて終わり。トイレも、使用後にひしゃくで一杯流すだけという状態だった。二十年前どころか今がそうなのだ。

「はたからどう見えようと、そこでその人たちは精いっぱい生き、働いている。基本的には援助など不可能。自己満足にすぎぬ」という声もある。「それは平和人の無意識のエゴイズム。知ってしまった以上ほっておけないから」と答えながら、それにしても日本の援助はと、肩身の狭い思いをさせられる。

日本が世界一の援助額を誇るODAにしても、暮らしの助けにならず、むしろ貧富の差を助長しているとの理由で、ODA促進項目も大会宣言の条項から削除された。

その動議をだしたのが二十二歳の女性。彼女はカレッジ卒業直後一年間、福井県で中学の英語助手として過ごした経歴の持ち主だった。日本滞在中の休暇を使って近隣諸国を旅し、その時出会ったフィリピンの人たちを支援するグループのメンバーとしてこの会議に参加して、「それらの費用はすべて文部省のおかげ」と、いたずらっぽく笑った。フィリピンからの出稼ぎ労働者、観光ビザだけの不法労働者たちの日本での状況が、彼女をフィリピン問題に向かわせたのか、と質問してみたが、「それは関係ない」としか答えなかった。

この目の輝きを信じる

大会は、二十二か国それぞれの決議案と宣言の採択でしめくくったのだが、会議の終盤、どういう形で人権侵害にあえぐフィリピンの人たちを支え連帯してゆけるのか、具体的に実際の効力をどう持ち得るか、熱い議論がふつと上した。「どういふかわり方を、われわれと本気で持つのか」と問いかけられ、のどもとに短刀をつきつけられる思い。でも「どういう援助が自分にでき、この人たちの真の支えになり得るのか」考えつづけていた。

サルベージ（虐殺）、マサカー（大量虐殺）、エバキューエーション（強制立ちのき）等々、平穏な暮らしに慣れきった私などにはおおよそイメージの湧かない単語がポンポン飛び出す。アルゼンチンから来た二人のシスターやジュネーブから来た南アの黒人女性のスピーチよりも、私にはフィリピンの政治的混乱のほうがずっと驚きだった。

カナダの決議文の中の“レズの人権”に地元フィリンから異論が出たのもうなずける気がした。ナイロビで南アやイランの人たちのレポートを聞いた時、自分の自立への悩みや哲学的難問も、しょせん修羅場には程遠いと思った気持ちも反芻しながら、当地の人の感覚にレズの人権は平和人のタワゴトでしかないかと理解した。日本の罪（戦前軍隊、今、企業の海外侵出）をひとり背負ったような切なさには押しつぶされそうにもなった。

一週間の会議を終え、少人数でフィリピン各地へ散る視察旅行にイザベラの地を選んだ。首都マニラから特急バスで九時間余り、山あいを抜け、段々畑もあり、ヤシやバナナの樹さえなければ、日本とほぼ変わりない風景だ。

重い心の闇から抜け出せたのは、イザベラで農村指導者として明るくがんばっているジージという名の若い女性とそのグループ、それを支えるシスターに出会ってからだ。そこでのプログラムは、カソリック教会のゲストハウスを使って行われたウイメンズ・コート（婦人による裁判）で、次々に登場するサルベージやマサカールの犠牲者の家族の窮状を耳にすることから始まり、翌日からはその人たちの住んでいる村を訪れた。

「このドアを蹴って軍服の男たちが入って来て、発砲、コミュニストの嫌疑を受けた夫は留守だったので、次男が死に、長男は脚をうたれ……」といった話を幾つも聞く。

タガログ語をなまりのキツイ英語に直してもらいながら、血のりの中で死んだ息子さんの写真を見せてもらうのは、正直疲れた。犬も猫もガリガリにやせている。が、牛も豚も鶏も自由に歩き回っていて、会議場にまでヌーと顔を出したりする。カラバオ（水牛）と一緒に河で泳いだが、貧しくとも明るい、目の輝いているこの人たちのエネルギーを信じたいと思った。

私はこれからフィリピンの勉強をはじめめる。



各団体アピール（三）

学生だから真剣なのです！

日本学生リサイクル協会旗揚げ

地球を守る 日本を守る

学生が日本で初めて地球環境を

真剣に考える会発足

昨年、環境問題がアルシユサミット

をはじめ様々なところでDEBATE

されています。しかし、一口に環境問

題といっても様々なものが挙げられま

す。酸性雨問題、地球温暖化、ゴミ問

題、熱帯雨林の問題等々。

もちろん、このことは地球規模の問

題であることは間違いない事実なので

すが、よく考えてみると日本を含めた

先進国が引き起こした200Cの弊害で

あることを、決して忘れてはならない

と思います。

かつて、人類は繁栄を享受してきました

（イギリス産業革命、日本の高度

成長）ですが、その度に大きな代償を

支払ってきたことは、周知のとおりで

す。では、一体我々はどうすればよい

のでしょうか。いや、その前に我々二

十一世紀をになうであろう学生たちで

何かできないだろうか？

一部の学生を除くと全く無関心であ

り（もちろん以前の私たちもそうでし

たが）、自分は全く環境破壊に加担し

ていないと思っているのです。

しかし、大きな誤りにだんだんと気

づきはじめ、それで少なからず我々大

学生も無関心ではいられなくなったの

です。

そこで、我々が今できること、やら

なければならぬことを真剣に考えな

ければいけないのです。大事なことは、

現在の環境破壊をより多くの学生に伝

えることだと思えます。そこで、環境

問題に関心を持ってもらうネットワー

クを作ろうとしています。それには報

道関係者の方々のご協力をいただき全

国の大学生に呼掛けたいのです。

△概要▽

名称 日本リサイクル協会

会長 中央大学 2年 丸山寛朝

事務局 東京都港区六本木

4-1-13

入会資格 同会の主旨に賛同する全国

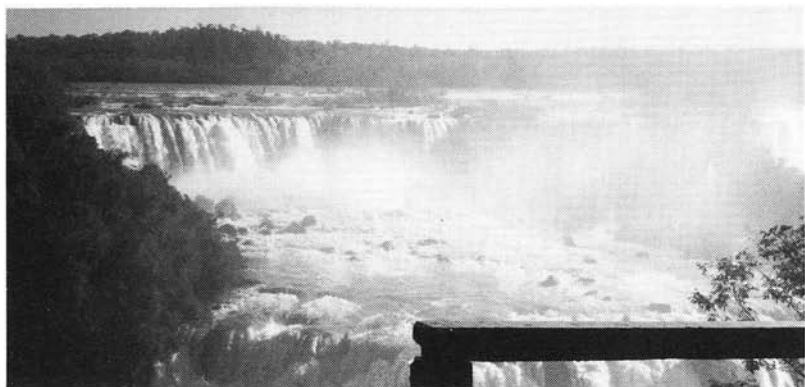
の大学生及び学生。

入会費無料（ボランティア活動の為）

申込方法 電話又は右記住所へハガキ

で応募して下さい。

◆保守的なこの土地、松山に、新
風を吹き込みたいと、〈あこら松
山〉では、今度、エリーナ姫の冒
険の英語テキストを注文。みん
で学習会を始めようと、ハリキッ
ています。



わたしの

ブラジル見聞記

桑原ちる子



くる日もくる日も晴れだった。ブラジルは乾期、冬なのである。

七月二十九日、母とわたしは成田をたつて二十九時間後、予定より六時間おくれてサンパウロに着いた。出迎えは、妹と妹のつれあい、それに運転手のFさん。車はフォード。ナンバーのないフォード。窓ガラスに紙がはってあるのが許可書でもあらうか。

運転手さん付きとは豪勢なと思ったが、話を聞けば、いつ故障するかわからないので、修繕もできるFさんを頼んでの出迎えになったということだ。

ブラジルは日本の二十三倍の面積、サンパウロ州が日本と同じ広さである。

サンパウロ州で農業をしている妹の家は、空港から三百キロほど離れた、人工約三万のサンタ・ヒッタという町である。

義弟は茨城県出身、三十数年前、十八歳でブラジルに渡った。妹は「移民花嫁」として、ブラジルの人となった。二十四年前のことである。

空港からの途中、レストランに寄った。余った料理をもったいなく思ったので、わたしは「もちかえりたい」と言った。

義弟とウエーターとのやりとりは「犬に食べさせるので持ちかえりたいが」「犬は多いのか?」「背丈が一メートル五十センチもあるのが五匹だ」「それはたいへんだ。持っていけ」と、いうことだ。この食事代へ鳥のからあげ、フェジョン（豆を煮たもの）ポテトフライ、サラダ、パン飲み物などなど五人分が一月の最低賃金（四千九百クルゼーロ、約一万円）に相当することである。故にレストランを使うことはない、



ということだ。

初対面の義弟であったが、わたしの「もったいない病」に共感したのか、残り物を受け取ってレストランを出た。いたるところにブーゲンビリア、ハイビスカスの花が咲いていた。家には五匹の犬、いや、甥二人、姪三人が待っていた。大学生三人、高校生二人、この五人は日本語を話せない日系ブラジル人である。

母も、わたしも、家の中では日本語が話されているものと思っていた。しかし、かれらはポルトガル語を母国語とし、日本語は、おばさん、おばあさんの区別すらできなかった。

サンパウロには日系人が四十万人もいる。日本語だけで生活している人が大勢いるとのことだ。けれども、人口約三万人のサンタ・ヒッタには、日本人は妹の家を含めて三家族。日本語を話すことはないという。滞在中、ポルトガル語のわからないわたしたちは妹一家を混乱させたわけである。日本語もポルトガル語も話せる日系ブラジル人は恵まれた環境にある人だけであることを実感した。

学校教育は二部制で、落第もあるけれど、人数が少ない時は学齢前でも小学生になれ、姪も早く入学したとのことである。

スクールバスが走り、身障児、幼稚園児、小、中、高生まで一緒に乗せていく。口紅ついたり、イヤリングをした小学生もみかけた。

学費はスクールバスはじめ、すべて無料とのことである。

大学も公立サンパウロ大学に通う二人は無料で、食費も大学の食堂で日本円にして一日十円で済むとのこと。私立に通う一人は卒業後、学費を返していくとのことである。三人とも下宿生活で、その費用が相部屋を借りていても、最低賃金一か月は必要とのことである。学生寮に入ればこれも無料。けれども、大学に合格するのも難しいが、学生寮にはいるのも難しい、という。

ハイビスカスの花咲く冬にも驚いたけれど、夜の寒いのにも驚いた。一年に一度か二度霜が降りる。昼間、半袖で過ごしたのに、その霜が降りたのだ。毛布にくるまって、ブルブル震えながらブラジルの第一夜を過ごした。一日のうちに、春夏秋冬あるのが、サンパウロの冬なのだ、と妹は言った。

「大草原の小さな家」を想像してほしい。庭に出たら三百六十度の眺望。遠くにさとうきび畑、まわりは牧場と雑木林。大地主のプール付き家があり、そのまわりに点々と使用人の家がある。その点のひとつに妹家族は住んでいるのだ。

家は三LDKほどの平屋。天井もなく、裸電球がとまり、床は赤土でかためてある。清潔な床なのだけど、土間だ。入口に台所、つまり、玄関に台所。「使用人の家はこんなものよ」と妹は言ったけれど、ひとつ感心したことがあった。それはトイレである。シャワー室に水洗トイレなのである。「昔からトイレは水洗に決まっている。遅れた国から来ると、そんなことに驚くのだから」と、笑われたが、旅行中、水洗でないトイレにあわなかったのは、不思議でさえあった。

妹家族は五百アールほどの土地と家を借りて野菜を作っている。三十年以上も働いて土地も家ももてないでいる。それでも義弟には、成功したほうと慰めているようなところがあった。なぜなら、渡伯当時、茨城からは四人の青年が一緒だった。他の三人のうちの一人は自殺、一人は日本にもどり、一人は行方不明、という「事実」があるからだ。五人の子どもは育った。家業を手伝いながら、子どもたちは大きくなった。土曜、日曜が休みの学校。休みの日は真っ黒になって働く学生生活。そして受験勉強。

広い畑で、他人に会うこともないから着るものも健康だけを考えて着ればよい。衣類は季節がないから半袖とズボンでまにあう。妹家族はボロを着て働いていた。

街でもスカート姿は少なかった。ハレの日とケ（普段の日）の区別がある世界だからだ、と思う。サンパウロのような都会では東京と変わらないのであろうが。

サンダ・ヒッダは馬車が交通機関として使われる静かな街である。

サンバもランバードもこの国の音楽かと思うほど静かである。牧場には馬、牛、鶏、



がちょう、犬、猫、が放し飼いされ、なかよく共生している。

ゴミは所かまわず捨てられるのだけれど、動物が食べた、土になったりして、問題にもなっていないとのことだ。もちろん、ゴミといっても果物の皮などであるが。捨てる物が無いといったら正しいのか、生産される物でゴミになるものなど無いといったら正しいのか。

「鶏がないて卵を生んだと知らせているよ。さがしにいこう」という母に、妹の答えは「ほっときなさい、そのうちヒヨコを連れてくるから」であった。実際、がちょうはヒヨコを連れて歩いていた。犬や猫にいじめられないかと、ハラハラしたが、そのようなことを心配するのは母とわたしだけだった。

芝の美しいこと、ゴルフ場のようだ。馬、牛、鶏、と一緒にゴルフ？夢の世界だ。農薬もいらぬ。このアイデア、だれか生かしてはくれないだろうか。

牧歌的なこの地にも八月二日のニュースは伝わった。戦争になるのだろうか。イラクの出来事は石油とからんで話題になった。日本車の看板はみかけなかったけれど、オートバイのスズキ、ホンダ、ヤマハの看板はいたるところで見た。

ブラジルではアルコール車が走っているとのことだ。アルコールはさとうきびからとれる。砂糖とアルコールがブラジルの産業になった。コーヒー畑が砂糖きび畑に変わった。大地主は砂糖工場主に土地を貸して利益を得る。砂糖工場主は砂糖とアルコールで利益を得る。

石油の代替エネルギーとしてのアルコール、砂糖きび畑をイラクにからむ話題にしたのである。

ブラジルには人種の差別はない。あるのは貧富の差別だという。一九八五年三月、二十一年にわたる軍政から民主政権に変わった。が、貧しい者はあいもかわらず貧しい。



一九八九年は一、七六五パーセントのインフレだった。本年三月十五日コロル政権が発足した。経済担当大臣はゼリア・カルドソ蔵相、女性だという。現在、月一〇〜一三パーセントのインフレ率だとのこと。なんとかインフレを押さえてほしい。そして、その努力がイランの事件で破産にならぬよう願うばかりだ。

物価が上がっても、賃金は上がらない。現在、日系ブラジル人が十万人ちかく、日本へ出稼ぎにきているという。日本に帰る八月四日、わたしは日系新聞を買った。そこには、ふるさと日本の姿が「老父母をホームに預け、ペットをかわいがる子たちの国」と写っていたり、「父の日、母の日、くしの日、〇〇の日、と、一年三百六十五日より多



そうなの○の日に踊らされている商業主義の国」として紹介されていた。

いわゆる三Kの一つ、老人ホームで介護の仕事をしている日系ブラジル人たちは失業者ではない。日系企業で働いていた、銀行員、教師だった人たち、むしろブラジルではエリートとよんでいい人たちが「出稼ぎ」にきているように思う。そしてふると日本の「こころ」に会いたくて、失望しているように思える。そのような記事が多いように思えた。

わたしはといえば、老いた母との旅ゆえ、老人を大切にする人々にどれだけ助けられたことや。また、身障者が普通に生きているのも心地よかった。運転手のFさん、かれは子どもの時の栄養不良により、腰が曲がっていた。けれども、歌もギターも上手、時計も、ラジオも、車も直す人として尊敬されていた。

ガラス工芸の職場も訪問したが、そこでは、耳の不自由な人たちが働いていた。地主の子は頭が悪いということだった。しかし、隠すようなことはしない。

妹家族の友人宅を二軒訪ねたが、台所も見せ、飾らないのである。女の働く場、台所が隠れ場になっていないのである。便利な位置にあるのを見せられ、女の地位と台所の位置が関係あるのではないか、と感じた。そして、妹の家の「入口に台所」も、この国では自然なのだ、と思った。そして、ポルトガル、スペイン、イタリアからの移住者が築いた家に親しみをおぼえた。

ブラジル最後の日、サンパウロ大学在学の姪と共に地下鉄に乗った。当然のことなが

ら、いかがわしいポスターなど一枚も見ることにはなかった。東洋人街で和食を食べた。定食日本円にして五百円。刺身、てんぷら、焼き魚、豆腐、茶碗蒸し、酢のもの、汁、御飯。安い。

日本人が海外でブランド品を買い漁って、ひんしゆくをかうけど、あれは金持ち日本人のやることではない。貧しい貧しい日本人のやることだ。定食五百円、安い。食べられるものなら、もう一人前食べて帰りたい。そう考えているわたしと同じ日本人がやることだ。現地の人にとっての五百円はわたしの一万円の感覚だろうか。

姪はこの日初めて、地下鉄に乗り、初めてお刺身を食べたのだ。サンパウロ大学に何人の日系人が学んでいるか知らないが、お刺身を知らない人はいなからうと別れの宴になったのだ。

それにも気づかなかったわたしは、東京に帰ればいつでも食べられるのですからなどと口ばしてしまったのである。相手の身になって考えることのむずかしさを、痛感したことはある。

十日間の短い旅であった。観光といえばイグアスの滝に出かけただけである。妹たちは長年住んでいても、わたしたちとつきあって初めてイグアスの滝へ行ったのである。飛行機を持ち、飛行機で農場を往来する大富豪がいる。一方、ファベラ（貧民街）に住む人が四分の一というサンパウロ。富豪誘拐が頻発するブラジル、臓器移植のために子どもが売買されていると調査が行われているブラジル。ブラジルにトルストイはい

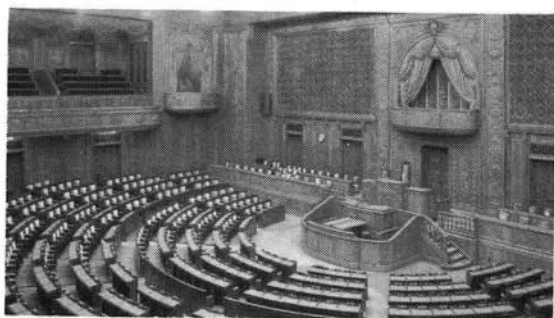
ないのか？ゴルバチョフはあらわれないのか？などと、あらぬことをぼんやり考えていたら、サッカーの王者ペレが一九九四年の大統領選に出馬すると知った。新聞は「ペレは、教育の権利と秩序を保障する社会民主主義が理想であり、社会主義の国が最もうまく富を分配していると思う、と語った」と伝えている。

妹が渡伯した二十四年前、ブラジルへは五十日かかった。今、二十三時間で着くのである。地球は小さくなった。しかし、貧富の差は大きい。働く者への富の分配は少ない。姪や甥は、日本のおばあさん、おばさんは大金持ちと思ってくれたかしら、などと内心ニヤニヤしているわたしではあるけれど、地球の裏側へ行く費用は簡単には得られないのである。十日の連続休暇をとることも難しいのである。

いくらかでもブラジルに関心をもたれた方は『耳をすまして聞いてごらん』（ほんの木社刊）をお読みいただきたい。そこには、貧富の差激しいブラジルのスラム街（ファベラ）の生活が描かれている。著者の小貫大輔氏はファベラでシュタイナー教育を学びつつ、二年間ボランティア活動をした方である。

ファベラは高速道路を走る車からも見え、あそこにはどんな生活があるのだろうか、と感じさせるものがあった。

言葉も不自由、プライベートルな旅である。見たものも少ない。しかし、観光地では見られないものを見、考えさせられたので書きとめてみたしだいである。



『国会』



ウォッチング

国会ウォッチング

しました

大島ふさ子

国会を見学するには、議員さんの紹介がないと入れません。見学ルートも限られ、不快なボディチェックにも会います。

国会開設百年・記念イベントのひとつ、国会の「特別参観」が、十一月三十日から十二月二日までの三日間行われました。好奇心の強い二人、斎藤さんと私は、「晩秋の台風」の中を……「きょうは豪雨。出かける人は少なそう」でも、国会議事堂に着いてその期待は裏切られました。なんと一万七千人のひとが全国からやってきたのです。

いつもと違って、受付で渡された記念シールを胸に張れば、入場はOK。正面玄関から堂々と入れます。正面玄関が開くのは、①総選挙後の国会招集日 ②天皇がみえるとき ③外国の国家元首がみえたとき、と非常に限られています。これは貴重な体験でした。正面玄関は広く、高く、キリッとしますね。板垣退助、大隈重信の銅像の前に立った斎藤さんは、なぜか伊藤博文には近寄らず次の会場へ。

(後で聞いた話。博文は大キライだそうです)。

議場内は傍聴席から見ると、下からのぞいた方が親しみもあり、広さも感じませんが、職員席の椅子は背すじをのばさないと疲れるようだし、メモを取るのもきつそうです。「あの椅子はとても具合が悪そう」と斎藤さん。

順路にしたがって各委員会議場へ。国の重要法案はすべてここで話し合われるので、しっかりとみておきました。

国会の中ではいろいろなひとが働いています。衛守さんもそのひとり。一日の仕事の様子をビデオで紹介したり、速記の実演もご披露。所要時間は二時間でした。

それにしても三日間で約十一万人が見学したとのこと。

国会の関係者は一、二万人を見込んでいた様子ですが、この落差はいったい何なのでしょう。十一万人の見学者は別に国会の現状、ありようを確かめるために押し寄せたわけではないでしょう。話の種とか、観光のつもりがほとんどのはず。最近国会移転の話題も出ていますが、今いちばん問題なのは『中身』なのだ。

「あちら」は国会百年を記念して「国会」ウォッチングの会をつくりました。フットワークを軽くし、傍聴にでかけたり、デモに参加したり、議会(地方議会も含む)へ女性を送り込んだりして、もっともっとウォッチングを続けなければ、と思った一日でした。

「議席に近づいて」 見えたもの

斎藤千代

均等法ならぬ「禁等法」に通いつめた国会。メモは手帳大の小さな紙一枚限り、戒厳時の成田にも似たボディチェック……。思い出すだけでゾッとします。国民に開かれた「特別参観」で新しく見えるものがあるかと出かけた。簡単にいうと、ふしぎ、ふしぎの連続。そして、あゝ、帝国議会のままだということ。

まず、主権者たる国民が日常は正面玄関からは入れない。議場の「高天原」のような高さに「御座所」がある。

官僚は「政府委員」の名で議員より高い席から見下ろす。――戦後、軍閥・財閥は解体できたけれど官閥は残ったとGHQが嘆いたという話を聞いたことがあります。占領軍が統治の便法として残した官閥が、今の政治の硬直化の根源ではないかと、議場というハードウェアの姿からも感じたことでした。

傍聴では「公衆席」から見下ろすだけだった議席は、同じ階(中には入れない)に立って「近望」すると、ゴブラン織りの美しさながら、映画館のような固定席です。座席

の幅も狭く、太めの方はつらそう。そして高さは「男性専用」。女性は疲れるのではないかと、議員さんたちに本音を聞きたくなりました。

その固定席から与党も野党も政府を見上げ、天皇のご臨席に最敬礼する構図。国会百年の行事として、何よりも内装を全面的に変えてほしかった！ 英国議会のように与野党が対峙して激論する「場の設定」がまず必要ではないでしょうか。

「禁等法」の時、労働大臣に質問すると、必ず赤松婦人局長が立って巧妙きわまりない答弁をするのに歯ざしりしたものです。官僚は本来公僕、つまり国民に仕えるはずのものなのに、与党にびったり密着。あれでは野党は歯が立たず、いつまでたっても責任政党にならない。まるで「弱いほうに」ハンディがついているようなもの。完全武装した強者が弱者をめった打ちして採決するのが国会。勝ち目は初めから明白、国民があきらめの境地に入ってしまったのは自然のなりゆきだけど、だから怖い。

……今ならまだ逆転できるかな。豪雨に靴の中まで水浸しになりながら、だんだん気が減入ってきました。

消費税であれほど与論を負いながら、結局定着。国会は「立法の府」。行政チェックの大討論の場でないのが何ともくやしきことです。気分一新には遷都もいいけれど、ま

ずは議事堂の内部改装。議席を平場にしてほしい。そして最新のハイテクを使った情報公開。本会議はもちろん、すべての委員会もビデオに収録、NHKでも民放でも放映、議場内はもちろん、少なくともJR各駅でいつでも見られる……ようになれば、私たちが目撃したような、「議事時には与党議員は不在、採決となるとドドドとどこからか現れるふしぎ」もなくなるでしょう。悪質の野次を飛ばす人は、すかさず大写し。居眠りも大写し。その録画は、選挙戦に誰でも利用できるようになれば、コケにされつ放しの国民も、少しは目が覚めるのではないですか。豪華な国会の建物や冷暖房の維持費も、議員さんや秘書さん、警官だけでも四百人をこえる職員のお給料も、みんな私たちの税金です！

〔付記〕女性が速記者になれたのが一九四四年（恐らく戦争中の人手不足）、速記者のズボン着用OKになったのが七二年。速記者だけに限れば女性が三分の二だけど、速記録には検閲者の目が必要、その人数を含めると、六対四くらいで男が多くなるという展示パネルがありました。

隣接の国会図書館、福沢諭吉の書「男も人なり女も人なり」で始まる「女性と政治」コーナーは、山口美代子さんたちが二年余の準備を重ねられたものだけに、すばらしい内容でしたが、紙幅の関係で次号にご紹介しましょう。

“Sexuality Communication” 1960年代にアメリカで登場した、性教育 (sexeducation) に代わる新しい言葉。

1964 (S39) 年に、アメリカで性情報・性教育評議会を作ったカルデロン (性科学者) とカーケンダール (産婦人科医) は、ある行為にしかすぎない Sex という言葉を使うこと自体がおかしい、行為でなく存在そのものである sexuality - 性的存在としての個人の全人格を含む言葉を使おうと提案、さらに、education などという押しつけをやめ、みんなで話し合おうじゃないか、というわけで communication にした。

この言葉を使うことで、性行為は「両足の間」にある器官がするものから「両耳の間」にある器官 (大脳) がするものだという考えに変わった。しかも、従来非常に限定的に考えられていた生殖につながる性行為とは別に、もっと広い性行為あるいは性衝動とその充足に関係する行為がセクシュアリティ・コミュニケーションであつかわなければならなくなる。例えば、乳幼児期における性衝動から自己愛、マスターベーション、同性愛の性、老人の性などがすべてこの中に入ってくる。こういうことを抜きにして性を語っても意味がない。

現在までのところ国際的に一致したセクシュアリティ・コミュニケーションの理念がある。

- 1) 教義・ドグマ、宗教的な戒律・タブーを教えるものでなく、知識を教えよう。
- 2) 性の否定から性の肯定へ。セックスの喜びは、すべての人に等しく与えられた権利であるという考え方を、認めていこう。
- 3) 画一的な規範から多元的選択へ。個人の性的な表現と性的行動は既成の権威やモラルによって評価されてはならない。現代の性教育は、他者の権利と福祉を損なわないかぎり個人の自由な意志決定を支持する。

こうした国際理解に比べると、日本の性教育は性風俗の取締りが目的の婦道婦徳教育の復活にすぎず、処女尊重思想の押しつけの域を出ない純潔教育でしかない、という旧態然としたものに過ぎないと言えそうだ。

とまれ、行為そのものを指すか、解剖学的固定的なイメージで使う生物学的性別 (セックス) より、文化的・社会的・心理学的性別 (ジェンダー) のほうに比重がかかるようになってきた現在、新しいイメージの広がり、われわれの生活の豊かさも広がって欲しいものだ。

「言葉だけ変わっても……と言わないで、古い閉ざされたイメージのこびりついた衣は脱ぎ捨てよう。言葉こそ自縛の重い鎖。断ち切る勇気を、明るい未来展望へ向かって！」

小倉千加子 『セックス神話解体新書』より (奥川 睦)

松田聖子論

小倉千加子著

飛鳥新社刊

面白かった。この人の溢れるが如き才が見てとれる。俗を扱って俗を脱し、それでいて俗を侮らないしたたかな視點がある。野次馬根性や好奇心の旺盛も見てとれるが、そういう言葉が俗っぽすぎて浮かんてこないほどにまで昇華されている。それでいて、決してビュリタニズムにはならない。著者の言うちみもうりょうの世界にいて、それらにホンローされることなく、彼らと適当な距離を、時に応じ、縮めたり延ばしたりしながら楽しんでいっていた風情だ。今後の活躍を期待するや大！

つられて一気に読了した後、書きなぐった感想をこんなふうに綴っていた。大阪府立婦人会館での「性の研究会 Part III」の第一回「松田聖子の挑戦―ポスト戦後の幸福術」はスゴかった。一晩かけて船賃を払い出かけていくだけの価値が十分あった。小倉千加子ってどういう人物なのだろう、久しぶりに私の好奇心がムクムク起き出してきた。この本を読んだのは松山での「小倉千加子講演会」が実現、へあくら松山」旗揚げに東奔西走している最中のことだった。

タイトルは「松田聖子論」だが、単純な人物論を抜きん出ている。山口百恵との対象論の組み立てがすこぶる巧みで、歌や詩と、うたっている本人の生き方と混同したりはできないナドとしたり顔に俗論をはさむこともできないほどの説得力なのだ。松田聖子が好きだ嫌いだの次元を越え「フェミニズムの本」として、「フェミニズムのパロディ本」として痛快だ。

『セックス神話解体新書』の著者以外によるあとがきを書いた黒澤亜里子氏（『女の首―逆光の知恵子抄』の著者）によれば、小倉さんの文章にはある種のリリシズムがあり、その奥に「透明な悲しみ」とそれゆえの「人恋しさ」人間好き」とでもいったような二つの顔が見えかくれしている。小倉千加子の口から機関銃のように発射される言葉は、その舌鋒の激しさにもかかわらず、つねにこの種のメタ・メッセージを含んでいるため、あれだけ言いたい放題、挑戦、暴言、脱線転覆をしていても、不思議と聞く者の敵意をかきたてないのかもしれない。……と言っている。この人の存在そのものの持つ魅力が文章にもにじみでて来るのだらうと私は勝手に私設応援団長にでも

なつたようなくもりで思う。

心理学者だということもあって、ちよこちよこ出て来る専門用語や引用もおもしろい。対抗同一性——社会的には少数派（マイノリティ）辺縁性（マアジナリティ）にある人々が、多数派（マジョリティ）や体制に対して、自らの生き方に積極的な価値を認め主張する同一性——などは「あこら」の目指す価値観そのものと言う気がして、ああそういうふうと呼ぶのか、と、感心しながらも、同一性（アイデンティティ）そのものの持つ深さがわかっていなければ、この言葉の意味も消化不良になるかなアとも思った。

ブリッ子の定義「男性の心理や夢を熟知しているがために超一流の演技者となって男性のファンタジーを演技する者」（水田宗子『ヒロインからヒーローへ』）や、母親とは、「マンツーマン・ディフェンスでもって、男社会の庇護の中におしとどめるために娘の

もとへ送りつけられた世間の代理人」だ、と決め付けた一文などには、言い得て妙と感服しながらも、おかしさがこみあげてきた。「こういう母親ではなくて、良かったね」と、わが娘ともども大笑いしてしまったほどだ。笑っていられない背筋の寒さは、もちろん感じながらではある。

百恵の「秋桜（こすもす）」にひっかけ、「秋の日の女の円熟とは、マゾヒズムの別名です。母と娘の絆はマゾヒズムをそれとは気づかず継承させていく絆にほかなりません」とも言う。明日嫁いでゆく娘は、もはやそれまでの歌に出てくる悪女でも年上の女でも、自立に葛藤する女でもなく、母の人生と同じ受苦の人生、忍耐と諦念の生活、つまり母の住む宇宙（コスモス）に入り母と同一化を図ることで、自立した女」として生きる恐怖を回避したのだと「秋桜」を分析しながら、それまでのヒット曲の延長線におく。

そして山口百恵を、制度に回帰する日本の女になつてしまった薄幸の少女。百恵の引退の年デビューした松田聖子は、日本の女にならないナシヨナリズムを超えてゆく少女だというのである。「百恵の歌が、ベッドに行き着くまでの恋愛の駆け引きについてほとんど時間を費やさないうちに、性急に男にあげてしまう少女の歌であるのに対し、聖子は恋の駆け引きを女性上位に思う存分展開したあげく、第二幕とも言うべきベッドの中での行為については、完全に沈黙を守っています」と絵解きし、聖子を「欲望を自覚した禁欲的な少女」「性から逃げ、永遠に処女のままの少女」「少女の身体を男性ファンタジーの中に投げこみつつ、少年の身体をもすっかり自らのファンタジーの中に引きずり込む少女」だ。「男に媚びたままでズルズルと、男の快楽の客体と化してしまう少女」ではない。男性に向かつて、「あなたも女性の心理

や夢を体現する超一流の演技者たれ」と要求し、「そうでなきゃ、つまんない」と言う少女でもある、と。とまれ絶対に妻にしたいくない有名人のトップタレントに松田聖子が挙げられる現実ももう一方にはある。でも常に男は選ぶ側、女は選ばれる客体でしかないというステレオタイプそのままのアンケートなどは笑いとばしてしまいう元気を、われわれは身につけたい。この本の帯のように「わがままと言われてもいい。こんなふうに生きたい」と言える勇氣を持ちたい。少なくとも他人のモノサシで右往左往するのをやめ、自分自身の価値観で生きるライフスタイルを持ちたい。…とは思えども、思えども……???

(あこら松山 奥川 睦)



おすすすめの “フェミニズム” の本を
お知らせください

“へあこら” 会員がすすめるフェミニズムの本のブックレットを
発行準備中です。

あなたが良いと思われる “フェミニズムの本” または “フェミニストの著書” を、どしどしお知らせください。

ご自身の著書の自薦も歓迎。
書名・定価・発行所・判型・ページ数と推薦理由(200字以内)
をご明記のうえ、左記にお知らせを。



〒160 東京都新宿区新宿1-9-6

あこら編集部

総合演出 桐谷夏子

空間構成 富山妙子

司会 中原道子

とき・1991年3月8日(金)

9日(土)

開場・PM6時30分

開演・PM7時

9日(土)はマチネーあり

PM1時30分開演

ところ・東京芸術劇場(JR池袋西口

駅前)

前売り券 三千円 当日券三千五百円

電話予約をへあこらで受付ます。

☎03(354)3941(大島)

主催・afafステバル実行委員会

事務局 東京都世田谷区桜丘4-1-6

12 富山方

☎03(425)6095

または03(227)2837

〔編集後記〕

◆へあこら松山〉の旗あげから二年半、

身辺雑事もむちゃくちゃに忙しかった。

フェミニズムが遅まきながらやつと浸透(?)してか、はたまた積もりにつもった怨念が吹き出してか。それとも、自分自身男社会の論理に余りに忠実に良い恰好をしたり、自分を強く抑圧していたからか。そんなことをつらつら考え始め、四十六歳にして初めて親ばなれ、夫ばなれ、子ばなれにもがいた二年半でもあった。

思えば、桜の舞い散る新宿御苑から帰松早々、小倉さんのライブ版をブックレットにと素人の右往左往。マニラの国際女性会議まで飛び込み、衆議院選の応援、新しい職場でのとまどい等々、子どもの反抗期も亭主の単身赴任も、知ったことかの二年半でもあった。

小倉さんのまいた、インパクトの強いトゲも毒も深い味わいのある種や実は、この固い保守のやせた土地にも根づく信じ、遠い先へは樂觀的な視線を送りながら、生きていきたいものと

思っている。(OKU)

◆愛媛は、波立たぬ怠け者の海。この海に漂って静かな薄闇に憩うわたしたち。この静けさが、決して「自覚された静寂」ではないことを知りながら、怠惰な寝床に寝ころび続ける。「ふるさと」という名の闇に。

そうした甘えには限り無く甘く、変化の芽には鋭く果敢に戦いを挑む……「ふるさと」という平和。

自覚し、自立した個人というものが、この風土でどのようにして育まれるのか、と言えば、やはりこうした出会いの繰り返しでしかないだろう。小さな衝撃がいくつも重なるとき、この薄闇がまんものならない暗幕として、乗り越えるべき壁として認識される時が来るのだろう、と思いつつ。

(深見 史)

◆理想をかかえて、市民運動に情熱を注いでいたのに、パートにでたり、いい男ができたとなん、無関心になった

り、〈へあごろ〉や『婦人公論』に載っ

ているような、育児にいらだったり、孤独を感じたり、夫の不実に苦しんだりする女が、日常生活でかわる女の

なかにはいないし、天皇制反対を唱える過激派が、実行していることも、本質はついていなくて、裏で警察とつるんでいて、たんなるセレモニードという意見を聞いたりして、やはり、

女も男も、一人残らず望んでいるものは、お金と社会的地位と美しさと異性であって、けっしてみんなの幸福などではないのだ。そういう私でも〈へあごろ〉のメンバーでいられるふしぎ。

(窪田初恵)

◆ともなわなない経済以外は一応余裕が
ではじめ、さてと腰をうかす。何からはじめよう。女性の自立が叫ばれ、私も、などと思いつつ、その一歩が踏み出せない。意識の問題だ。ポランテ
イアも考えた。しかし、虚心坦懐でいられない。自分のこだわりが……やは

り踏み出せない。

不惑の年に手が届いた今。自分を見直したい。半歩でも、心豊かになれる方向へ、ゆっくりとゆっくりと。

(荻野)

◆晩秋の一日、奥川睦さんの新居ウォ
ッチングに出かけました。入居前のどの部屋から彼女も熱と意気が伝わるようでありました。

保守コチコチの松山に〈へあごろ〉の息吹を吹き込んでくれる奥川さんに応えるだけの力を育てたいのですが……

(森 幸子)

◆松山から力作を頂きながら、こんなに遅くなったことをおわびします。小

倉さんの講演デビューがすばらしかった
ので、「何とか全記録を」と交渉を重ねましたが、残念ながらお許し頂けませんでした。うなぎのにおいだけ嗅ぐような欲求不満を感じになった読者も多いと思いますが、講演の趣旨は、小倉さんのご著書『女の人生すくろく』

(筑摩書房刊四六判二一五ページ一四四〇円)でお読みください。その時の率直な質疑応答も、〈へあごろ松山〉立ち上がりの熱気を伝えて余りあるもの、

そしてフェミニズムの基本的な問題にふれる貴重なものでしたが、この号には収載できませんでした。おゆるしください。

それにしても、感想文にしても編集後記にしても、なんとみずみずしい文章。汚れちまった東京と違って、地方にはまだまだ心もエナジーもあることを感じます。〈へあごろ松山〉の三年目に、心から期待します。

(東京・事務局)

B O C からのメッセージ

『十四歳の戦争』が全国学校図書館協会の推薦図書になりました。これを記念して、会員の方には定価1854円のところ、1440円でお分けします。送料はB O C負担です。詳しくは別紙を参照に。またはあごろまでお電話を。

へあごらは、ギリシャ語でへひろはの意味。

女の生き方、人間の解放について話しあうへひろは。さくのないへひろはです。

経歴も年齢も性別も関係なく、同じ平場で話しあおう。ちがう価値観にも耳傾けよう。

そして、女も、男も、生き生きと、のびやかに生きられる社会を目指そう。

と、一九七二年以来、資料誌『あごら』(年一回刊)を、また一九七七年からは『月刊あごら』を発行してきました。

特定の、管理された情報は氾濫していますが、私たちのほんとうにはしい情報は手に入りにくい現状のなかで、女の側が必要とする情報を集め、資料に基づいて討論したいと願っています。

あなたの地域の、職場の、そしてあなた自身の情報を、どしどしお寄せください。全国各地のへあごら拠点にもお出かけください。

●へあごらは、どの企業、どの政党、どの宗教とも、いっさい無関係。

会費と、有志の基金と、雑誌の売上代で運営しています。

●全国各地の拠点は、それぞれ、その地域に応じた活動をしています。

●現在の主な活動は、

①拠点を軸にした勉強会や社会活動

②『月刊あごら』および『特集あごら』の発行

③女性の創造力や専門的技術を集めた創造力の銀行(BOC)の運営

④読書室の運営

⑤可能性教室(英語教室、再就職準備講座など)の運営、その他。

●会費は月額六百元(年額七千二百円)、前納制。入会金は不要。

●申し込みとお問い合わせは、

〒160 東京都新宿区新宿一の九の六 あごら事務局(TEL 03-354-3941)へ

あごら 158号 1990年12月10日 発行

●編集 あごら松山

●発行所 BOC出版部 〒160東京都新宿区新宿1-9-6 ●03-354-3941 ●振替東京0-5264

●発行人 <あごら> 企画会議 定価 412円(400円+税12円)

